

秋のリーグ戦、 大学・社会人関東



春の敗戦、苦しみから這い上がったチーム
心身を鍛え直した昨夏の秋田合宿

王座決定戦で

V

準硬式野球部員 学生記者 森康太郎 (法3)



私たち準硬式野球部は昨秋、3季ぶり63回目となる東都準硬式野球リーグ戦優勝と、関東地区の5つの大学リーグと社会人リーグから優勝チームが集う関東地区大学・社会人準硬式野球関東王座決定戦で6年ぶりの優勝を果たしました。

しかし、シーズン初めの春の関東地区大学準硬式野球選手権大会で4位、春季リーグ戦では3位と、12年続けていた全日本大学準硬式野球選手権大会の出場を逃して、「常勝中大」の伝統を断ち切ってしまう、計り知れないつらい思いを味わいました。そのどん底からどのようにしてチームを立て直したのか。チームが大きく変わることができた要因は秋田合宿にありました。

苦しんだ春

私たちは毎年夏の全日本大学準硬式野球選手権大会での優勝を目標に、日々練習に取り組んでおり、まさかその大会に出場できないとは全く想像していませんでした。

春のシーズン中は、負けられないというプレッシャーから緊張してしまい、普段なら起きない平凡なミスや消極的なプレーが続きました。不思議なことに、ここ一番のときに精

神的な弱さから納得のいくプレーをすることができなかつたのです。これではチームに勢いが生まれるはずもなく、常に苦しい試合展開でした。負けたことに加え、思うようにプレーできない自分たちの弱さが何よりも悔しかったです。

「精神的な弱さを打破すること」。春のシーズンを終えたとき、それが最大の課題として挙がりました。

「努力しても努力しても実らないことはある。しかし努力しなければ

実ることは絶対はない」

準硬式野球部を応援する会の佐々木吉夫会長のお言葉であり、われわれチーム一人ひとりが大切にしている言葉です。弱さに打ち勝つ自信をつけるためには、練習しかありません。そう心に決め、チームは秋季リーグ優勝に向けて、意識を変えて再始動しました。

自らを追い込んだ 秋田合宿

毎年8月初め、秋田県三種町^{みたね}で合宿を行います。この地で39年続く伝統ある合宿です。合宿期間の12日間の毎日、合宿所から「ことおか中央公園スカルパ野球場」まで片道8キロをランニングで往復し、1日に一人6合のおいしいあきたこまちを食べ、合宿の終了時に多くの選手が体重を平均4キロ増やし、体力向上を図ります。

また、学員会秋田県支部の皆さまや三種町の町民の皆さんから私たちが気遣った差し入れ、励ましの言葉を頂戴し、選手一同、多くの方々



秋田合宿でランニングを行う選手たち



グラウンドでミーティングをする選手たち＝昨年8月9日、秋田県三種町の「ことおか中央公園スカルバ野球場」

の支えで合宿ができていると実感しています。

合宿では「考える野球」をテーマに掲げ、「打者はどんな球を投げられたら嫌なのか」「投手は今どんな心境なのか」など、池田浩二監督からも一貫して「頭脳を使って野球をしろ」と指導されました。

野球は相手の心理や行動の弱点を知ることでゲームを優位に進められ、相手の考えを推測することはとても大事です。差し入れを届けてくださる方々の気持ちを理解すること、プレー中に相手の心理を読むことは、相手の気持ちを考えるという点で共通し、つながっています。合宿ではそうした部分でも頭脳を使っています。

「一歩を踏み出す」

秋田合宿では、朝から晩まで野球漬けの毎日。少しでも効率的に練習しようと、グラウンドの隅から隅までを使い、選手たちが個々の練習に取り組みます。ランチタイムも個々に任せられ、グラウンドを使用していない時間帯はありません。つらいランニングメニューでグラウンドに流れる音楽は中央大学校歌、応援歌です。

練習では「もう限界だ」と思ったところからもう一段、自分自身を徹底的に追い込みました。ランニングで最初から全力疾走し、ペースが落ちそうだというときこそ、もうひと踏ん張りしてペースを上げたり、バット

スイングの決めた数が終わってもさらに数十回プラスしたり。自分の限界を超えようと各自が努め、一歩を踏み出すからこそ、レベルアップや心の変化に結びつくと確信しました。

モチベーションとなったのは春のシーズンの悔しさです。「二度とあんな思いはしたくない」「秋こそ結果を残してやろう」と、気持ちを奮い立たせました。ランニングを走り切った後の達成感は今でも忘れません。練習の中で自分自身の弱さと戦い続け、それを乗り越えた合宿でした。

培った自信

試合でプレッシャーに打ち勝たなければいけない場面は、練習で自分を追い込む場面と似ています。自分の弱さにどう立ち向かってそれに打ち勝つか、相手との戦いというより、自分自身の心との戦いなのです。

合宿で繰り返した練習が大きな

自信につながりました。秋季リーグ戦では、この自信を糧に、選手それぞれが考えたプレーを心掛け、プレッシャーや緊張感をはね返しました。最優秀投手賞の近野祐樹(法2)、首位打者を獲得した足立裕紀(商3)をはじめとする6人がベストナインに選ばれ、チームは春から大きな成長を遂げることができました。



です
人山本労務

J:COM



「第41回関東地区大学・社会人準硬式野球王座決定戦」の決勝戦(対早稲田大)。優勝の瞬間、マウンドに駆け寄る中大の選手たち=昨年11月10日、ダイワハウススタジアム八王子(八王子市民球場)

レギュラーの座つかみ取りたい 今が一番の頑張り時

森康太郎選手



チームは秋、優勝という結果を残しましたが、捕手の私自身は膝の靭帯じんたいを痛めてしまい、試合に出られずに悔しい思いでシーズンを終えました。

秋は後輩の高橋孝成(商2)が捕手でベストナインを獲得し、あせりや危機感を覚えています。静岡高校時代はレギュラーとして甲子園にも出場しましたが、中大では現在までレギュラーになれず、苦い思いをしています。

かつての私なら、こんな状態になればひどく落ち込んでいました。しかし、もうだめだろうと諦めてしまうのではなく、合宿で学んだ強い精神力と、豊富な練習量で自信を

つければ、思い切りプレーできるはずです。

大事なのはうまくいかないときに、どれだけ頑張れるか、これが人間の真価だと思います。浮上できるかできないかの境目、つまり今が一番の頑張り時ということです。

昨年の経験と悔しさを常に心に置きながら、今年は勝負の年と覚悟を決めて取り組んでいます。どん底から這い上がった昨年のチームのように、必ず復活してレギュラーの座をつかみたいと思います。レギュラーとして今年こそ全国優勝を達成します。

しかし、たとえ控え選手であったとしても、控え選手だからこそできる大きな人間に成長します。

硬式と使用ボールに違い

硬式野球との違いは使用するボールにある。準硬式のボールは、表面と見た目は軟式球のようにゴムで覆われ、中身は硬式球と同じようにコルクを糸で

巻いたものが入っている。握った感触や大きさは軟式球とほぼ同じだが、打った感触と跳ね方は硬式球と同じ。全国では約270大学が日本一を目指し、競い合っている。

中央大学準硬式野球部

設立: 1947(昭和22)年

リーグ戦優勝: 63回

全国優勝: 12回

部員数: 32人

女子マネージャー1人